

地域情報（県別）

【福井】「運動できるとこないやんか」地域ニーズを踏まえ高齢者施設やジム等を展開-木村晃朗・医療法人明峰会理事長に聞く◆Vol.2

「アイデアのきっかけは勤務医時代の経営会議」

2024年9月20日（金）配信 m3.com地域版

医療法人明峰会（敦賀市）の木村晃朗理事長にとって2000年の院長就任は父の急死に伴う「青天の霹靂」だった。しかし、木村氏は日々敦賀の町を回り、患者の声を聞くことで地域ニーズを意識するようになる。2000年代に介護事業を始めて以降、複数の高齢者施設をつくったほか、地域の健康増進を目指して待合室そばにメディカルフィットネスも開設。「地域の人が集まる場づくりをしたい」と話す木村氏に事業展開の背景を聞いた。（2024年8月20日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら



木村晃朗氏（本人提供）

「医療度の高い人の受け皿」目指して老健開設

——お父さまの急死に伴う院長就任でしたが、木村先生はそれから多様な事業展開を行います。まずは、木村病院の病床転換とクリニック化の背景をお聞かせください。

院長に就任した2000年にまず、それまでの一般病床（52床）を医療療養病床（39床）に変えました。周辺に複数の急性期病院があるなか、父が中心だった個人病院が看護師を確保しつつ急性期医療を続けるのは経営的に難しいと判断したためです。

病床をなくして「明峰クリニック」を開設したのは2009年です。当時、国は将来的に療養病床を廃止しようとしており、すでに存続させていくには厳しい診療報酬点数だったため、「早い段階で対応した方が良いだろう」と考えました。

とはいえ、そのころに敦賀市の民間病院で療養病床を備えているのは当院だけだったため、医療度の高い人、つまり、気管切開や人工呼吸器の装着、胃ろうをしている患者さんの行き場がなくなるおそれがありました。当時はその

ような状態の人が入所できる施設が近くなかったため、たとえ病床をなくすにしても、地域の人が困らないよう受け皿をつくる必要があると思いました。そこで、クリニック化と同年に小規模サテライト型老人保健施設「気比の風」（現在29床）をクリニックのそばに開設しました。こちらでは酸素療法ができるよう、全個室に酸素配管を設置するなど病院に近い造りにしました。



小規模サテライト型老人保健施設「気比の風」の外観（ホームページから引用）

——木村先生は院長就任の2年後に居宅介護支援事業所を院内に設けます。介護事業にはどんな経緯で関心を持ったのでしょうか。

石川県の恵寿総合病院に勤めていたことが影響しています。私は当時、心臓血管外科の科長として部科長会議に出席し、病院経営に関する話をよく聞いていました。同院は幅広く事業を展開しようとしており、2000年の介護保険制度施行を見据えた介護施設の開設も議題に挙がっていました。「医療と介護の連携がこれから進んでいくんだな」と業界の流れをそれとなく感じていたことが、敦賀市に戻って来てから早めに行動に移せた要因だと思います。

病院とご自宅の間を埋める存在、病院は退院したものの、すぐには在宅復帰できない人のための施設が地域に必要だろうと考え、2004年に介護老人保健施設「リバーサイド気比の社」を開設、同年に通所リハビリテーション「じゃらん」も立ち上げました。

ジム構想は患者の声「運動できるとこないやんか」

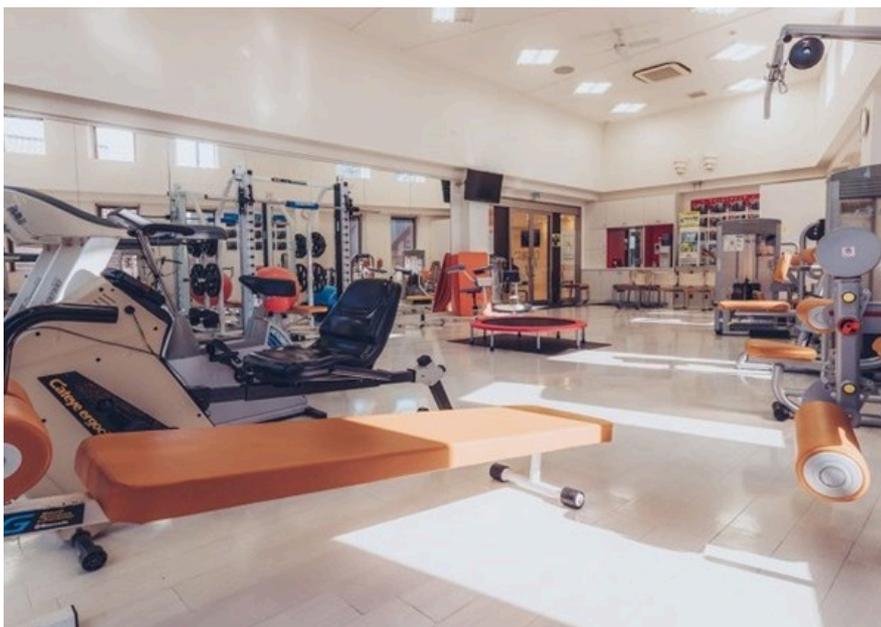
——介護事業を進めていくほか、2011年には院内にメディカルフィットネスも開設します。どんな流れで思いついたのですか。

患者さんの声を聞いたことと、実際にクリニックとフィットネスの複合施設を見学したことでアイデアが具体化していきました。

健診を受けた患者さんの検査結果を踏まえて運動を勧めても、「でも先生、そんなところ近くにないやんか」「具体的に何したらいいの」と言われることがあったんですね。当時は周辺にジムができ始めていましたが、それらはどちらかといえば若い人向けに運営されている、機材だけが置いてある店舗でした。トレーナーが丁寧に教えてくれるところが近くなかったので、スポーツインストラクターが常駐するメディカルフィットネスをつくらうと思ったのです。

見学したのは、私の母校・金沢医科大学の先輩、浦田哲郎先生が運営する複合施設「浦田クリニック/スクール金沢」（石川県金沢市）です。こちらではクリニックと健診センターにメディカルフィットネスやプール、温泉などが併設されています。このユニークな施設を見て回ったときに感動し、「こんな地域の集いの場を敦賀にもつくりたい」と思いました。

当法人のメディカルフィットネス「MEIHO」は、待合室に併設されており、ガラスで隔てられています。こんな構造にすることで待合室に座っている患者さんが一生懸命に汗を流している利用者を見ることができるので、患者さんの運動意識向上にも寄与できるのではないかと考えました。また、院内に設けることで運動中にケガなど何かあってもすぐに医療行為を受けられます。



メディカルフィットネス「MEIHO」（ホームページから引用）

「高齢患者が地域で住み続けられるよう」暮らしの場も

——2013年にはグループホーム、2018年にサービス付き高齢者向け住宅も開設します。

いずれも患者さんの声や地域ニーズを踏まえたものです。全国的な傾向と同様に敦賀市も高齢独居や老々介護がとでも多く、認知機能の悪化で一人暮らしを継続できなくなる方が増えていました。当院の近くには認知症高齢者向けのグループホームがなかったため、患者さんが住み慣れた地域で暮らし続けられるよう、またご家族も面会しやすいようクリニックのそばに「明峰夢（めいほうむ）」をつくりました。

サ高住（アネックス明峰）もまた、高齢独居の人が地域で暮らし続けるには必要な施設だと思います。こちらはグループホームとは異なり、自立した生活を送れる人が比較的自由度の高い日々を過ごすことができます。経営面には難しさがありますが、建築コストをできるかぎり抑え、安価な家賃設定にしたつもりです。

こんなふうに医療・介護・暮らしの場を当院周辺に整備してきましたが、個人的にはこういったカテゴリーよりもっと広い「地域の集いの場」をつくりたい思いもあります。メディカルフィットネスの構想を思いついたとき、本当は院内に自然食などを提供するレストランやエステサロンなどもつくりたかったんですね。このあたりは今も課題というか、将来的な展望として抱いています。

◆木村 晃朗（きむら・てるあき）氏

1991年金沢医科大学卒。同大学病院、恵寿総合病院を経て2000年に木村病院院長に就任。2001年に医療法人化し、2009年に病床を閉じて「明峰クリニック」を開設。2000年代からは介護事業も開始し、複数の高齢者施設やメディカルフィットネスも運営する。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】



